

(要約)

伊藤整における「心理小説」の形成とその転回に関する研究——第一詩集『雪明りの路』から『得能五郎の生活と意見』(1926—1941)を中心に——

尾形 大

【目次】

序章 日本近代文学における「心理小説」の系譜と錯視性——伊藤整と一九三〇年代——

第一部 抒情詩人としての出発——詩から小説へ——

第一章 伊藤整文学における「詩とのわかれ」の考察——「現実」をめぐる葛藤——

一節 問題の所在

二節 先行研究の検討と『雪明りの路』の世界観

三節 一九二七年における「故郷」の変質

四節 一九二八年における「現実」への眼差し

五節 「故郷」の喪失

六節 結論

第二章 詩から小説へ——文学的転換の内実——

一節 問題の所在

二節 一九二九年の活動と「現実」への接近

三節 萩原朔太郎『詩論と感想』の影響

四節 「現実」の実態

五節 「詩とのわかれ」の「現場」

六節 結論

第二部 新心理主義と「心理小説」の形成

第三章 「新しい心理小説」をめぐるブルースト文学受容の実態——短編小説「アカシアの匂に就て」における心理描写の方法——

一節 問題の所在

二節 伊藤のブルースト受容

三節 「錯覚のある配列」と“The Death of Albertine”

四節 「アカシアの匂に就て」と“The Death of Albertine”

五節 「新しい心理小説」とブルースト文学

第四章 翻訳家・伊藤整と一九三〇年代——第一書房版『ユリシイズ』翻訳を軸として

一節 問題の所在

- 二節 伊藤の翻訳経歴と翻訳界の状況
- 三節 〈翻訳論争〉と伊藤整「翻訳の研究」
- 四節 二つの *Ulysses* 翻訳
- 五節 「イカルス失墜」への反映

第三部 新心理主義の模索と応用

- 第五章 新心理主義から幻想的「心理小説」への展開——「生物祭」成立の背景——
 - 一節 問題の所在
 - 二節 昭和初年の『ユリシーズ』ブームと新心理主義
 - 三節 新心理主義批判と「作者」への眼差し
 - 四節 「新しい心理小説」と伝統的私小説への眼差し
 - 五節 『若い芸術家の肖像』と「生物祭」
 - 六節 結論
- 第六章 伊藤整と「〈文章論〉の時代」——心理描写のための文章をめぐる——
 - 一節 文章論をめぐる研究史と問題の所在
 - 二節 〈新しい文章論〉と『日本現代文章講座』の周辺
 - 三節 『日本現代文章講座』における〈新しい文章論〉の模索
 - 四節 伊藤整の文章論の実態とその展開
 - 五節 結論
- 第七章 「幽鬼の街」における構造的心理への眼差し——新心理主義からの脱出と私小説的方法への転回——
 - 一節 問題の所在
 - 二節 「幽鬼の街」の周辺
 - 三節 「街」における心理の描かれ方
 - 四節 私小説における「私」と語り手の〈ズレ〉
 - 五節 結論

第四部 新心理主義からの脱出と転回

- 第八章 書き下ろし長編小説『青春』における心理の描かれ方——新心理主義と『得能五郎の生活と意見』の狭間で——
 - 一節 問題の所在
 - 二節 書き下ろし長編小説『青春』の周辺
 - 三節 「架空の物語」としての『青春』
 - 四節 他者の心理を創作する作意
 - 五節 結論
- 第九章 『得能五郎の生活と意見』における「余談」的方法の内実——自己批評的「風

刺」の構造と自己戯画化の獲得——

一節 問題の所在

二節 ゴーゴリ受容史と伊藤の『死せる魂』論

三節 「空想家とシナリオ」論に見る「面白」さの所在

四節 『生活と意見』における「余談」的方法とその実態

五節 自己批評・自己戯画化の文学

終章 自己戯画化と自己批評の文学史——伊藤整文学の射程——

各章初出一覧

本研究は、伊藤整（1905－1969）の抒情詩人としての出発期から、新心理主義を通しての心理小説の模索・形成期、新心理主義からの脱出口を求めて苦闘した模索・応用期、そして心理を構造的に捉える認識の枠組を通して独自の文学表現を実現した転回期までを全四部構成で考察したものである。

第一部では、第一詩集『雪明りの路』（1926）において抒情詩の形式で「私」の心情を表現する地点に文学的出発を果たした伊藤が、一九二九年六月に「詩とのわかれ」を果たすまでの詩風の変化を分析した。第二部では、小説家として再出発を果たした伊藤が、無意識を含む人間の心理を緻密に描出したプルーストやジョイスの新文学の翻訳、新しい日本語および文章論に関する精力的な研究を通じて、それらを創作面に反映させながら新心理主義を模索していく現場を検証した。第三部では、新心理主義に行き詰まりを覚えた伊藤が、「生物祭」（1932・1）において幻想的な要素を取り入れることで心理をより鮮明に描出する新たな文学表現、方向を見出していく経緯を追った。その上で、新心理主義からの脱出をはかった伊藤が、心理の世界を幻想を中心に描出する方法を用いながら、同時に作者の自伝的情報を色濃く投影した「私」を通して自己批評的な〈眼〉を描き出した「幽鬼の街」（1937・8）までの文学活動を考察した。第四部では、はじめての書き下ろし長編小説『青春』（1938）で「架空の物語」の創作を試みた伊藤の試行錯誤の痕跡を浮かび上がらせ分析しつつ、とりわけ他者を「観察」してその心理を「文学的な眼」を通して解釈するという発想に注目した。以上のような文学活動を経て、伊藤は『得能五郎の生活と意見』（1941）に到る。同テキストにおいて、他者の心理を一方向的に解釈し、創作性豊かに解釈する「余談」を中心化した方法を分析した上で、主人公「得能五郎」の〈空想〉を「筆者」の眼を通して批評的に捉える枠組、さらに私小説の枠組を応用して「得能五郎」と「筆者」、そして伊藤整という三者を覆う自己批評的な眼差しの枠組が形成されている形跡を抽出し具体的に検証した。自らを戯画的にとらえる自己批評的文学スタイルは、後の後藤明生や筒井康隆らが試みる文学表現の先駆としても位置付けられる。本研究は、以上のような問題意

識をもって一九三〇年代を中心に「心理小説」をめぐる伊藤文学の展開と転回の実態を考察したものである。以下、各章の具体的な内容を記す。

上記のとおり、本研究は伊藤整における「心理小説」の形成と転回の内実を出発期から戦時下までを中心に考察することを目的としている。この問題を考えるにあたって、序章「日本近代文学における「心理小説」の系譜と錯視性——伊藤整と一九三〇年代——」では、まず一九三〇年前後の「心理小説」をめぐる文学場を伊藤の文学活動を中心に整理し、日本の近代文学における「心理小説」史の錯視性という問題を提示した。それによって伊藤の「心理小説」との出会いから受容、その推移と模索の実態、そして転回に到るまでの背景／土壌を明らかにした。その結果、現在「心理小説」と呼ばれるジャンルは、明治期以降の〈心情を描いた小説群〉と一九三〇年前後に模索された「新しい心理小説」（とりわけ伊藤の新心理主義）という質的に異なる二つの小説ジャンルが混在して形成されていることを明らかにした。

具体的には、心情とは精神活動の表層に表れる人間の感情や思考、意識を指すものであり、〈心情小説〉とは「認識、感情、精神的成長などキャラクターの内面的な世界」（『最新文学批評用語辞典』研究社、1998）をあつかった小説全般を包含する大づかみのジャンルとすることができる。それに対して「心理小説」とは一過性のモードであり、フロイトの精神分析学を踏まえて人間の無意識の領域までとらえた構造的心理学を描いた小説を指す。これはさらに「外部」から「内部」を推測するフロイトの学説を踏まえた「心理」をあつかう「心理小説」と、個人の「内部」に沈滞し不確かな「内部」の構造を細密に描出し分析していくプルーストやジョイスの新文学に倣った「心理小説」とに分かれて展開していく。抒情詩人として出発した伊藤は、フロイト、プルースト、ジョイスの受容を通して「新しい心理小説」を段階的に模索していく。本章では、その過程で「新しい心理小説」に対する「伝統的な心理小説」の枠組が想定され、明治期までを射程におさめた「心理小説」の〈系譜〉が作られていったという見取り図を提示した。

第一章「伊藤整文学における「詩とのわかれ」の考察——「現実」をめぐる葛藤——」では、伊藤が詩という表現方法のどこに限界を覚えたのか、詩で果たし得ない表現方法、表現内容の実態とそれが初期の小説群にどのように描出されているのかを同時代の文学場の中に置いて検証した。この問題を考える上で、一九二七年から一九二九年五月までの二年半の間に、伊藤が基点としての『雪明りの路』（1926）の詩風をどのように変化させていったかを考察することから出発した。その当時の伊藤の詩や詩論、小説の中で取捨されている要素を整理・分析することで、その詩の変化と「詩とのわかれ」、さらには「心理」との出会いの直前までの伊藤文学の展開を明らかにした。

アイルランドの詩人 W. B. Yeats. 風の象徴詩の影響を色濃く受けて「故郷」を「背景」に作られた伊藤の抒情詩の世界は、実生活上の問題の影響を敏感に取り込みながら、それらをモチーフとして繰り返し歌い直されるという特徴を有すものであった。そして一九二

七年中には早くも「故郷」のイメージが変質しはじめ、何より一九二八年四月の上京と七月の父の死という出来事と前後して、家や家族をめぐる問題の様々な歌い直しがなされていた。そこでは詩「弟の日」「冬夜」「田園故郷を失ふ」といった家族を想う詩と、「海の捨児」「詩にかへる」のような離郷をうたった詩という形でのテーマ上の分裂がうかがえた。また、一九二八年夏に「試作上の転機」にあると語った伊藤は、「田園故郷を失ふ」に象徴される同時代的なプロレタリア詩の方向性も見据えつつ、同年末の詩論「ルナ」において詩人が「現実」と向き合う必要を説くに到る。

第二章「詩から小説へ——文学的転換の内実——」では、自詩を「抽象的悲鳴」と評した詩論「ルナ」（1928・11-12）を詩作上の転機と見、そこで提起された「現実」の内実についてプロレタリア的方向性とともにもダニズム的方向性への傾斜の可能性を論じた。とくに伊藤自身が当時「僕が最も重要視している著作だ。あれ程明快に日本の詩を説明し解決したものは無い」と発言した萩原朔太郎の詩論『詩論と感想』（素人社、1928）の影響に着目し、同書を通して詩と散文の接近・融合という発想を得た伊藤の詩のスタイル上の変化と、『雪明りの路』以来の詩の世界の変質・解体の試みを「猿」「南京の感情」「支那蕎麦」の三詩の分析を通して考察した。以上のような考察を通して、詩「猿」では詩の主体である「私」を「卑小・露悪」な存在に「失墜」させる試みが見られるだけで、伊藤の詩の世界を根本的に作り変える可能性を有したものではないことが明らかになった。「現実」という新たな問題意識に寄り添って自詩の変革を模索したものの、結局は元の世界の枠組みを「破」り新しい世界を開拓することはできなかった。しかし、自己の「失墜」を描くという発想は、詩の「私」と現実の「私」との間の〈ズレ〉と向き合う新たな路を拓くことにもなる。また、この頃手にした萩原朔太郎の『詩論と感想』（および同年十二月刊行の『詩の原理』第一書房）は、詩の領域にとどまらず伊藤に多くの示唆を与えた。日本語という言葉、日本という文化に適した文学表現を分析した朔太郎の発想は、海外の新文学に急速に関心を寄せるようになっていた当時の伊藤にスタイル上の転換をもたらすことになる。とくに、韻律ではなく「印象」に重点を置いた詩、散文（「印象的散文」）という方法上の着想は、詩と散文の境界を極めて接近したものととらえる思考を導いたと思われる。散文詩や図形、会話体の導入などの詩のフォルム上の新しい試みを経て、彼の文学表現は詩から小説の方向に移動していく。この時点で自己の内面（心情）を描出するという発想を持つに到っていた伊藤は、それを都会で生活する男女の恋愛心理を分析的に描き出す「飛躍の型」以降の小説で継続的に試みていくことになる。こうした文学上のモチーフは、フロイトの受容を経てプルースト文学、ジョイス文学への傾倒という形で「新しい心理小説」の道を準備するものであった。

第三章「新しい心理小説」をめぐるプルースト文学受容の実態——短編小説「アカシアの匂に就て」における心理描写の方法——」では、「新しい心理小説」の方法を模索する伊藤が、実際にはジョイス以前にマルセル・プルーストの文学を受容し、その影響下に「新しい心理小説」の試みがなされた問題を検証した。本章では、伊藤のプルースト文学受容

の経緯と実態に関する調査を進め、その結果を踏まえて短編小説「錯覚のある配列」（『文芸レビュー』1930・2）および「アカシアの匂に就て」（『文芸レビュー』1930・8）にどのような影響が見られるかを検証し、「新しい心理小説」模索の「現場」の一端を明らかにした。その結果、当初伊藤の「新しい心理小説」の中心にはプルースト文学、とりわけ一九二四年七月発行の *Criterion* に掲載されたスコット・モンクリーフ訳“*The Death of Albertine*”からの影響があった可能性を指摘した。「英訳をとほして読んでみたプルウストの感化」という発言に着目し、当時伊藤が眼にしていたであろうリトル・マガジン内から英語に訳された『失われた時を求めて』の一部の英訳“*The Death of Albertine*”を同時期の伊藤のプルースト受容の中心として特定した。“*The Death of Albertine*”を通してプルースト文学を理解したことで、強烈な感覚に呼び起された特定の記憶が〈想像力〉によって再構成され、現実と記憶の世界との境界を曖昧化しながら〈いま—ここ〉に存在する以上に鮮明に「失はれた」対象を現前するという方法を獲得するに到った。科学的見地に立ちつつ、同時に人間の心理を象徴的な手法で表現することで、「伝統的な心理小説」とは異なる「新しい心理小説」の構築が試みられたという経緯が明らかになった。

第四章「翻訳家・伊藤整と一九三〇年代——第一書房版『ユリシイズ』翻訳を軸として——」では、一九三〇年代の翻訳家・伊藤整の「創作的現場」に光を当て、同時期の翻訳界の動向の中にその翻訳観・翻訳規範を位置付けた。小宮豊隆の翻訳論「発句翻訳の可能性」（『文芸春秋』1933・8）に端を発する同時期の翻訳論争の中で伊藤も翻訳家としての発言を残している（とくに James Joyce の *Ulysses*. に関して）。しかし、その事実についてこれまで具体的に検証されることはなく、蹉跎、停滞の時期として一括りにされてきた。文学活動の中心を小説に引き寄せ停滞を強調する従来の見取り図の作為性を取り除き、実際に当時の「現場」に即すことではじめて伊藤にとっての一九三〇年代の実態が明らかになるのではないか。こうした問題意識をもって「新しい心理小説」をめぐる心理描写の模索と行き詰まりの内実を検討した。具体的に言うと、『ユリシイズ』翻訳を通して獲得・構築された伊藤の翻訳観、日本語観、文章観、文体観は短編小説「イカルス失墜」（1932・9）での文体実験を実現した。そして当初「新しい心理小説」における心理描写の模索としてなされたはずのものが、次第にその意味を日本の伝統的な私小説・心境小説の創作の領域から距離をとるための方策として押し広げられていった様子が浮かび上がった。とはいえ、結局伊藤はこの文体実験を継続することなく、自伝的な一人称小説を用いた独自の「心理小説」の方向へ、たとえば零落して帰郷した文学者主人公（伊藤ひとし）の心理を幻想的に描出する「幽鬼の街」（1937・8）の方向へ推移する。本章はそこに到る重要な水脈の一端を明らかにした。

第五章「新心理主義から幻想的「心理小説」への展開——「生物祭」成立の背景——」では、新心理主義をめぐる応用と多様な模索の実態から脱出までの歩みを追った。最初に伊藤のジョイス受容と意識の流れの文学実践に関して整理し、意識の流れの方法に行き詰まりを覚える一九三一年中旬までの創作の「現場」を確認した。当時、科学的裏付けを持

つ〈ウルトラ・リアリズム〉の文学表現と考えられた新心理主義は、小林秀雄らの批判を通じて「剿滅」されたものと考えられてきた。しかし、実際には伊藤はそれらの批判を通じて小説における「作者」という機能に着目し、作者自身を投影した主人公「私」の心理を「内部」から幻想的に表現する方向に「新しい心理小説」の進路を見出し得たと考えられる。その意味で「生物祭」(1932・1)は、新心理主義の行き詰まりと私小説的枠組への批判意識、さらに言えば性的欲望と信仰心の狭間で苦悩する主人公の心的動揺を描き出したジョイスの長編小説『若い芸術家の肖像』(1916)の影響といった地点に新たに試みられた「新しい心理小説」の一形態としてとらえ直すことができるのではないだろうか。

新心理主義時代の「窮地」の実態の分析を通して、「作者」という発想の獲得、深化といった伊藤の思考の軌跡が浮かび上がる。何よりそれは本質的に日本の伝統的な私小説のスタイルと関連していることが明らかになる。その上で作者自身の情報を取り入れた短編小説「生物祭」に眼を移してみると、「内部現実」(＝心理の領域)を表現する方法として「私」の心理というフィルターを通して「外部現実」が幻想性を付与され往還的に主人公の心理を構築していくという発想を得る重要な転機となった試みとして注目された。本章は〈幻想的心理描写〉とでも呼ぶべきこの方法の着想を、ジョイスの『肖像』から得たと考え検証した。その結果、欲望と心理的抵抗体の狭間で苦悩する主人公の心的葛藤、「告白」というテーマ性、そして主人公の心理が外界認識の歪み(幻視)として表現された点など、具体的な相関関係をうかがわせる箇所が確認された。付記すれば、この方法は故郷の風物にこびり付いた記憶の投影として主人公の心理の歪みを「幽鬼」という幻視によって表現した「幽鬼の街」「幽鬼の村」(1938・8)に展開する経路が拓かれていく。

「新しい心理小説」を中心とする当時の文学をめぐる動きを追っていくと、翻訳の問題と並行して心理を描き出すための文章の問題に行き当たる。当時「新しい心理小説」を先頭で実践し理論化しようと試みていた伊藤は、それを表現するための文章に関していかなる認識を持っていたのだろうか。この問題は谷崎潤一郎が『文章読本』(中央公論社、1934)で主張する「含蓄」を旨とする文学的な文章論とは異なる主知的な〈新しい文章論〉という観点から考える必要がある。第六章「伊藤整と〈文章論〉の時代」——心理描写のための文章をめぐる——では、「新しい心理小説」の実現に不可欠とされた心理を連続的かつ緻密に描写する〈新しい文章論〉をめぐる文学動向に注目し、その中に伊藤の文章論を位置付けた。それは極力説明しないことを理想とする谷崎潤一郎の文章論とは異なり、自身の心理をリアリズムの筆で饒舌に、同時に幻想的に描出し得る文章として模索されたことを明らかにした。その検証作業の中で、新潮社版『伊藤整全集』および曾根博義編『未刊行著作集一二 伊藤整』(白地社、1994)に未収録の文章や、「編集後記」で掲載誌・発表年月等に誤りが見られるものが複数確認された。

第七章「『幽鬼の街』における構造的心理への眼差し——新心理主義からの脱出と私小説的方法への転回——」では、「私」の構造的心理を「内部」から幻想的に描き出した「幽鬼の街」(1937・8)を、それまでの伊藤文学の展開の中に位置づけつつ考察した。「幽鬼

の街」で注目すべきは『ユリシイズ』の影響でもなければ幽鬼という幻想の導入でもなく、幻想的要素を組み込むことで「私」の心理を構造的に描き出した点にある。ここでの「私」は、作者自身を指し示す多くのサインを多く纏いながら、私小説的な読みの〈モード〉を喚起する情報が様々に散りばめられ立ち現れている。本章では以上の問題を、「幽鬼の街」における心理の描かれ方と私小説的な枠組の応用という二つの問題に分けて考察していくものである。その結果、「幽鬼の街」における〈幻想と私小説の融合〉という発想を通して、伊藤は作者の分身たる「私」と語り手との間に生じる〈ズレ〉に批評的な眼差しを向ける独自の文学表現の端緒をつかみ得たことが明らかになる。「幽鬼の街」での試みは、「心理小説」という概念を構築した伊藤が新心理主義の枠組みから脱出した後の方向を決定付ける重要な転機となる。何よりここでの到達は、作者の分身たる文学者「得能五郎」の心理を描き出した『得能五郎の生活と意見』(1941)を準備するという意味において重要となる。

第八章「書き下ろし長編小説『青春』における心理の描かれ方——新心理主義と『得能五郎の生活と意見』の狭間で——」では、書き下ろし長編小説『青春』(1938)を伊藤文学における新心理主義と『得能五郎の生活と意見』の間の結節点に位置付け、そこで試みられた様々な文学的模索の内実を明らかにした。西洋の長編小説にならって「架空の物語」として構想・執筆された伊藤初めての書き下ろし長編小説での試みとは、翌年八月から連載される『得能五郎の生活と意見』の創作の「現場」に多分に影響をおよぼす。「架空の物語」として自伝的要素を注意深く排除する一方で、作者自身の経歴の一部や過去の作品からの引用がモザイクのように散りばめられている点は、当時の伊藤の私小説観の一端をうかがい知るための材料としても興味深い。何より自他の心理の奥深さと認識不可能性への眼差しに加えて、心理を読み解くことに文学的な可能性を見出し、芸術と恋愛(生活)の葛藤、相克を描き出した点は注目に値する。ここで試みられた他者の心理を「観察」し「文学的な眼」を通して解釈するという方法は、『得能五郎の生活と意見』で心理を創作的に解釈し饒舌に描き出す、伊藤の独自の方法へと発展していく。

『得能五郎の生活と意見』には「風刺」と「笑い」という伊藤の新しい試みが組み込まれている。そしてそれらはきわめて意識的な小説方法として作意されている。ただ、その内実とは、先行研究が指摘してきたような〈時局への批判〉でもなければ、「トリヴィアリズム」とか「諧謔」といった言葉で安易に概括され得るものでもない。だとすれば、『生活と意見』の「風刺」と「笑い」はいったい何を目的に、何に向けられているのだろうか。おそらく、それこそが『生活と意見』において果たされた伊藤文学の転回を中心としてつかみ取られるべき点と思われる。第九章「『得能五郎の生活と意見』における「余談」的方法の内実——自己批評的「風刺」の構造と自己戯画化の獲得——」では、伊藤のゴーゴリ受容および『死せる魂』論、中野重治の「空想家とシナリオ」をめぐる一連の論文内容の検討を通して、伊藤が一般的に小説から排除されるはずの「余談」的な要素をあえて中心化する独自の文学方法に到達した『生活と意見』の創作「現場」を整理・検証し、その転回の内実を明らかにした。結果として『生活と意見』では、複数のレベルの風刺が有機的

な結び付きを形成しながら実現していることが明らかになった。それは私小説の枠組を利用した風刺という方法によって、「得能五郎」と「筆者」、伊藤整の三者を包含した自己批評的な枠組みが構築されたものとして機能していた。何よりこの自己批評的な風刺を成立せしめているのは、「余談」という発想・方法にほかならないことを論証した。

終章「自己戯画化と自己批評の文学史——伊藤整文学の射程——」では、自らを戯画的に描くことで自分と自分に関する既存の枠組を批評的に見、風刺する伊藤文学のスタイルが構築される経緯を概括した。その上で、「心理小説」という概念構築を通じて生まれ、はじめて形成され得たこの新しい文学スタイルが、後の後藤明生や筒井康隆らの文学にもたらした影響を指摘し、伊藤整文学研究の今日的意義を提示し今後の展望とした。